

多文化共生時代を迎えて ——日系移民問題をどう教えるか——

田 中 泉*

（1）現代日本における多文化共生社会の到来

法務省の統計によれば、2000年末の時点で、外国人登録者数は168万人を超えている。これは、日本の総人口の約1.3%にあたる。その中では韓国・朝鮮人が約38%を占めるが、1980年には約85%であったことを考えると、その割合は急激に縮小したといえる。逆に増えたのは中国人（20%）、ブラジル人（15%）、フィリピン人（9%）、ペルー人（2.7%）などである。彼らは総じてニューカマーと呼ばれるが、なかでも中南米からの日系人の定住者が圧倒的に多いのが特徴である。その原因は、1990年に入管法（正式には、出入国管理および難民認定法）が改定されて、日系3世までの「定住」が認められ、活動の制限がなくなったからである。当時、日本経済はバブル景気に踊っており、工場や土木工事現場では労働力不足が深刻で、その解消を日系人の雇用に求めていたのである。

日系人であるからといって、すべての人が日本語を十分に話せるとは限らない。今、日本に定住している日系人は「ことばの壁」によって起きるトラブルや悩みにさらされているのである。例えば、病気になれば、スペイン語やポルトガル語が母語である日系人にとって、病院で十分に意思疎通ができないことが障害になる。どんな病気なのか、また、どんな治療法が用いられるのかわからず、不安になり、医師や医療機関への不信感に陥ることも多い。「ことばの壁」から「こころの壁」が生じるのである。

日本は、かつて、移民の送り出し国であった。明治以降1960年代まで、多くの

* 広島経済大学経済学部助教授

人々が故郷を離れ、南北アメリカを中心に、新天地を求めて海を渡ったのである。1990年代になって日本へ来た日系人はその2世や3世で、外見上は日本人でありながら、日本語が話せない場合が多く、生まれながらにして母国の文化を持っている。

日本の中・高校生は、この状況を正しく認識しているのだろうか。また、誤った認識により、日本に在住する日系人に対して偏見を持っていないだろうか。それを防ぐには、どのような教材を開発するべきだろうか。

（２）移民研究の動向

最近、日本では、学術的な移民研究が活発になっている。その視点は、①移民を送り出す社会の事情（プッシュ要因）、②移民を受け入れる社会の事情（プル要因）、③移民の送り出し国と受け入れ国の関係、④移民前後の社会的移動、⑤移民とホスト社会の関係、⑥日系移民の特殊性である。特に⑥は、「出移民（emigrants）」と「入移民（immigrants）」の並存、「出稼ぎ」と永住者の分化、「還流」、日本人コミュニティの形成と変化など、興味深い研究が多い。また、①についても、地域史の視点から、移民を送り出す地域社会についての個別で詳細な研究がなされつつある。（後掲の参考文献参照）

（３）歴史教育における日本人移民

日本の初等・中等教育において、この日本からの海外移民あるいは、日系人の還流については、ほとんど触れられていないと言ってよい。現行の教科書で言えば、唯一、最も採択率の高い山川出版社の高等学校用教科書『詳説日本史B』において、アメリカ合衆国における1906年の「日本人学童排斥事件」と「日本人排斥運動」が触れられているのみである。これは、当時のアメリカ社会において、日露戦争でヨーロッパの大国ロシアと対等に戦った日本が世界の中での地位を上昇させつつあることに対する警戒感から、それまでほぼ無視されていた日本人移民が脅威として注目されるようになり、以後しだいに悪化していく日米関係の端緒となったという文脈の中で登場する。したがって、中等教育においては、もっと別の視点から多くの教材開発を行う必要があると思われる。

開発すべき教材のテーマとしては、①明治以降の日本人移民の実態、②移民を送り出した日本社会の状況、③アメリカ合衆国やブラジルなど移民を受け入れた国々の状況、④アメリカ合衆国の多文化社会の形成過程と日本人移民の関係、⑤日本人移民のコミュニティの変遷、⑥日本人移民（日系人）の還流、⑦多文化共生社会となっている現代日本における日系人の状況、などが考えられる。

目下、報告者は、これらのうち、①、②および⑥を高等学校日本史の教材として、③と④を高等学校世界史の教材として、⑦を中学校社会歴史的分野（ないしは公民的分野）の教材として開発することができると考えている。⑤については、地理歴史科ではなく高等学校公民科が適当と思われる。

今回の報告では、例として⑦を紹介してみたい。

（４）教材開発の事例

中学社会科歴史的分野の中単元「日本の発展と世界の動き」において授業「日本における多文化共生社会の形成」を設定する。

〔授業のねらい〕は、

- ・ 外国からの移民が増えていることにより、日本で多文化共生社会が形成されつつあることを認識する。
- ・ 外国からの移民、特に日系人が増えている背景を正しく理解することで外国人への偏見をなくし、異文化を尊重する態度を身につける。

である。

この授業では、まず、〔導入部〕で、生徒の身近な地域において、最近、外国人が頻繁に見られることに関心を持たせ、この授業の課題を知らせる。次に、〔展開〕の第１段階で、法務省の統計を利用して、在住登録している外国人が増えていること、中でも韓国・朝鮮人、中国人が多いことを把握させた上で、1990年以来ブラジル人やペルー人の入国が急速に増加していることに注目させる。第２段階では、韓国・朝鮮人が多い理由が戦前・戦中の強制連行にあること、およびブラジル人やペルー人の急増している理由が日本人の２世・３世、つまり「日系人」の還流・出かせぎにあることを理解させる。第３段階では、この「日系人」がかつて、日本が相対的に貧しかった明治時代以降、多数送り出した移民の子孫であることを理解させる。さらに、第４段階として、在住外国人が抱えている問題を具体的に把握させて、「多文化共生社会」となっている日本社会において、日本人と外国人が互いにどのような態度で接するべきかを考えさせる。

具体的な授業の学習指導細案および資料の提示については、中国・四国私立大学教職課程研究協議会の研究助成による成果を発表することが求められているため、別の機会に譲りたい。

主要参考文献

《日本人移民について》

- ・児玉正昭『日本移民史研究序説』溪水社，1992年
- ・Y・イチオカ『一世』刀水書房，1992年
- ・『日系移民資料集 第1期（北米編全18巻）』日本図書センター，1994年
- ・柳田利夫（編）『アメリカの日系人』同文館，1995年
- ・佐渡拓平『カリフォルニア移民物語』亜紀書房，1998年
- ・内山勝男『蒼氓の92年 ブラジル移民の記録』東京新聞出版局，2001年

《アメリカの多文化社会について》

- ・ロナルド・タカキ『多文化社会アメリカの歴史』明石書店，1995年
- ・越智道雄『エスニック・アメリカ』明石書店，1995年
- ・五十嵐武士（編）『アメリカの多民族体制』東京大学出版会，2000年

《現代日本の多文化共生社会について》

- ・藤原孝章（編著）『外国人労働者問題と多文化教育』明石書店，1995年
- ・田村太郎『多民族共生社会日本とボランティア活動』明石書店，2000年
- ・リリ川村『日本社会とブラジル移民』明石書店，2000年
- ・池上重弘（編著）『ブラジル人と国際化する地域社会』明石書店，2001年

※なお，法務省統計「国籍（出身地）別外国人登録者数の推移」のホームページは，
<http://www.moj.go.jp/PRESS/010613-1/010613-1-3.html>